



小さき群

救主降世2013年11月号 第89号

2013年度北海道教区宣教目標

『確かに未来はある あなたの希望が断たれることはない』
箴言23章18節

教会HP <http://www.obihiro-seikokai.com>

今ここにいる私

飯塚幸子

キリスト教が何であるかも深く知らずに結婚の為、洗礼受手を受けるというまったく単純な出発点です。夫の勤務地の都合で教会へ通うのも年に一、二度。聖書も読まないの牧師さんのお説教の中の聞いた事もない言葉に戸惑うばかりでした。

私は両親を満州で亡くし、私が10歳になった昭和21年、19歳の兄が妹弟を連れて八人で日本へ引き揚げてきました。両親がいまませんから兄や姉が下の者達の親代わりとなって面倒を見てくれていました。高校へ行きたくても翌年

はすぐ下に弟がいます。二人が高校へ通うという事は経済的にはとっても無理なので高校は断念しました。昼間学校へ行けないのなら働いて夜、定時制へ行こうと考えましたが、その頃片親でも中々就職が難しい時代でした。ましてや両親がないという事で思う様な所に就職も出来ず、随分と辛い思いをしていました。

その後、今のNTT、昔の電報電話局に就職することが出来ました。高校へ進学する夢は捨てきれず、二十歳の年に柏葉の定時制高校へ入学しました。働き乍ら四年間、夜、学校へ通うという事は並大抵ではありませんでした。

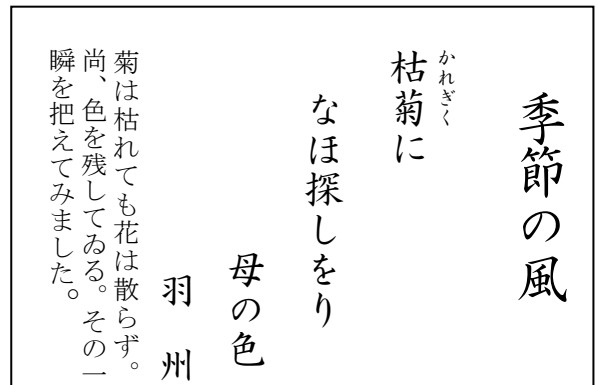
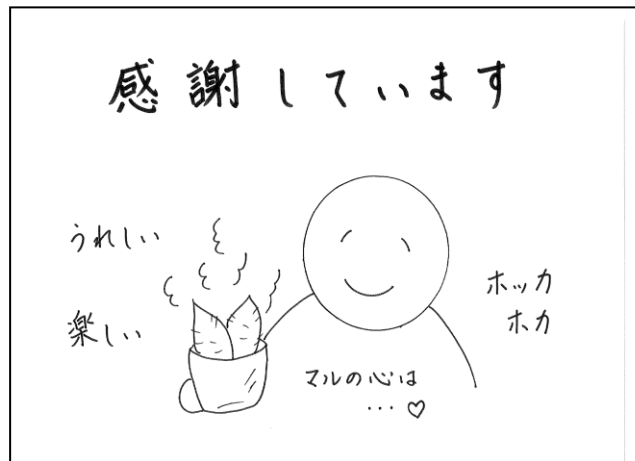
教会へ通えるようになりお説教を聞き、聖書のみ言葉も少しずつ理解できるようになりました。その積み重ねが私の心を変えていきました。自分で生きているのではない、すべて神さまに生かされている事に気づきます。頼れる者は自

分しかいない、人を信じず、神さまの存在も知らず、自分の道を歩んでいた私。クリスチャン

である夫と結婚して、神さまを知り、イエスさまに出会う事ができました。感謝です。

私の洗礼名は、マルタ。夫が付けてくれました。初めはもっと素敵な名前にして欲しかったと思った事もありましたが、今は私に最も相応しい洗礼名だと思っています。頼れる者は自分

しかいない、と強がりやを言い乍らも多くの人に支えられ、育てられてきました。こんな未成熟な私を神さまは決してお離しにはならないと固く信じています。そして神さまから愛されるような生き方をしたいと思っています。



不明瞭な悪とたたかう

司祭 下澤 昌

アンパンマンの産みの親であるやなせたかしさんが亡くなりました。私たちと同じ聖公会の方で、洗礼名はバルトロマイとのことでした。

先日、幼稚園の合同礼拝があり、私はその中でもアンパンマンを取り上げ、こどもたちにお話しをしました。イエス・キリストがどういう人だったのかを説明するのは、簡単なようで実は難しいことです。しかし、アンパンマンほど、イエス・キリストの姿を私たちに分かりやすく伝えている例はないのではないのでしょうか。多くの方々がそのことを感じておられると思います。

最も端的なシーンは、困っている人、お腹が空いている人に、アンパンマンが自分の顔の一部をとって分け与えるところに違いありません。肝心なのは、そのことによってアンパンマンは少し力を失うということです。



やなせさんの訃報を知らせる新聞記事の中に、やなせさんがよく引用した堀口大学の詩の一部に、「愛とは少し死ぬことだ」という言葉があるそうです。人を助けるために顔の一部を分け与えるアンパンマンは、「少し死んだ」者となるのです。それは、やなせさんが信じたイエス・キリストという人こそ、他者のために十字架の上で「完全に死んだ」者となったことから導き出されたことは想像に難くありません。

私が気になるのはバイキンマンの存在です。なぜ彼は意地悪をし、人を困らせるのか。はっきりした理由もなく、またそこには何の意味もありません。バイキンマンは子ども向けに作られた無邪気なキャラクターですが、キリスト教ではこういう不明瞭かつ理不尽な現象を「悪」と呼びます。理解を超えたところから自分に降りかかってくる困った事象によって、私たちの人生が大きく揺さぶられることがあります。戦争や災害などはその典型的な例でしょう。バイキンマンをアンパンチでやっつけるアンパンマンの姿は、迫害の激しかった初代教会で特に重視された「勝利者キリスト」の姿と重なります。不明瞭な形で襲い来る悪の事象に対して、たとえ私たち自身が完全に立ち向かうことができなくても、代わりにキリストが闘い、勝利して下さること。そこに希望があります。アンパンマンは、困ったらいつでも呼んでね、と語りかけます。それはまた、キリストの私たちに對する呼びかけでもあります。

やなせさんの業績に敬意を表し、魂の光明と平安をお祈りいたします。

「kitara」で歌う

小貫 睦子

10月16日。夫とともに「kitara」で歌いました。5,6年前に離れていた「せせらぎ合唱団」の指揮者高橋先生の最後の大きなステージでした。

最初「kitara」で歌わないかと誘いがあった時、「とんでもない」と即座に思いました。身の程知らずです。どう考えても無理。恥を搔くようなものです。大半の団員は同じ思いでした。躊躇する人が大勢出てきましたが、走り出した車は止まりません。どんどん日がせまってきても、まだ決心がつかなかったある日、突然 自分の事だけを考えて、どうしても「嫌」です。でも「先生の望みなら…みんなで歌おう。先生を喜ばせよう！」との強い思いが沸き起こって来たのです。先生は長い間、交通事故の後遺症と闘いながら、指揮に対する情熱を持ち続けてきました。お元気な頃は演奏旅行で、道内はもとより九州までも足を延ばし、まるで修学旅行のような楽しい思い出が沢山あります。まだこの足を踏んでいる人にも、参加を呼びかけました。

そして、当日。あいにくの台風の前夜。「何人の人が聴きにきてくれるのだろうか？」とみんな心配しました。私はたとえ誰もいなくても、全国から集まった団員がステージに立って先生の指揮で、歌えれば良いとすら思っていました。ところが幕が開くとな～んと1200人の人々の顔…。「先生の為に。先生を喜ばせよう」と集まった70名の団員が心をこめて思いを一つにして、歌い切りました。手を引かれながら去る先生は、嬉しそうに聴衆に手を振ってステージを後にしました。

「歌って良かった。」

心を一つに合わせたのは、歌った団員だけではありませんでした。裏方の仕事をしてくれた、先生の教え子たちも、仕事の都合をつけて駆けつけてくれたのです。

「誰かの為に。先生の為に」唯、これだけです。この大きな強い力はじつに清々しく、さわやかに私達の胸を浸しました。

「kitara」で歌った事は私の意識の中には殆どありません。楽しい演奏会でした。

長年着用したユニホームを洗い、タンスの奥深くしまい、ボロボロになるまで歌い込んだおびただしい数の楽譜は処分しましょう。私のけじめでもあります。

北海道教区礼拝研修会に参加して

大村倫子

10月11日から13日まで帯広で行われた礼拝研修会に、6年ぶりに参加することができました。そこで多くの兄弟姉妹と分かち合いの時を過ごし、自らの信仰生活を省みる機会が与えられたことに感謝しています。

初日の講演会で小貫雅夫司祭は『一日中働き詰めのひとつが説教の途中で居眠りをしても、そこに癒しがあれば教会の役割があり、牧師は信徒と礼拝の中でつくられる。』と話して下さいました。とても優しさに満ちた言葉です。

深い愛情と信仰で50年にわたり、教会と信徒を支えられた小貫司祭の思いが伝わってくるようで、胸が熱くなりました。

またクリスチャンとして“神の声を聞くとはどういうことか？”を常に問いかけ、オルガにストの奉仕をされている、菊池泰子先生のお話しも印象的でした。他教区との交わりがある聖公会の素晴らしさ、聖餐式の大切さ、チャントの歌い方等を教えて頂きました。楽しかったです。

13日の礼拝は、松井司祭の心温まる説教に励まされ、全会衆が一つになって祈ることが出来たと思います。

私たちは互いに繋がっていて、多くの祈りに支えられ生かされていることを強く感じる事ができました。この思いを忘れることなく、神さまの愛に包まれ喜びと希望を持って生きる者になりたいです。

2014年分帯広聖公会の教区奉獻額について

教会委員会財務担当委員 高橋献一

先日の教区での会議において、来年度の当教会奉獻額が確定致しました。

内訳としては、教区の宣教・伝道・維持運営の働きに充てられる教区費分担額が年間2百43万3千円(前年比2万5千円減)、教区聖職者の方々の生活・宣教伝道活動・研鑽に充てられる教役者給与奉獻額として3百33万1千円(前年比18万2千円増)、合計5百76万4千円(前年比15万7千円増)です。

他教会と同様信徒の高齢化が進行する中、年間約16万円の奉獻額のアップは大変厳しい状況にあります。信徒の皆様におかれましては、教区の基幹教会としての当教会の役割・責任をご理解頂き、来年度もより一層のご支援・ご協力をお願い致します。特に当教会年間献金額合計の約6割を占める月約献金について、金額の見直しを含め今一度ご検討下さる様お願い致します。

10月の教会委員会の報告・決議

1. 「逝去者記念聖餐式」(11月3日実施)について
2. 今年の「教会バザー」の収益から10万円を「パレスチナの子どもたちのために」として教区を通して献金。
3. 十字架タワー上部の十字架について、経年劣化から撤去。

◎十勝の豆の販売

今年も十勝の特産の豆販売の季節となりました。聖公会の多くの教会に案内をお送りしています。今年も豆の出来は上々です。相場価格は値上がり傾向ですが、値段は据え置きとして昨年と同じに設定しました。

お豆の袋詰めや梱包、発送は皆様のお力を頂きながら行います。作業の予定日は教会控室に掲示しますが、尾関までお問い合わせください

(Tel 0155(24)3756)。

作業は午前9時30分位から始めます。午前中に終り、昼には持寄りの昼食会となり、楽しい交わりの時となります。力仕事は無理でも、お喋りは楽しみという方も参加OKです。

皆で楽しくやりましょう。

豆な担当：尾関敏明



昨年の作業の後の楽しい交わりの様子です

今後予定される行事

- ・ 11/3 逝去者記念聖餐式
- ・ 11/22-23 第72(定期)教区会
- ・ 12/22 美唄・岩見沢合同礼拝
- ・ 1/19 後期主教巡回日

敬老会から“長寿祝福式”と名称が替わったの会に寄せられた諸兄姉からのお言葉です。

大村キヨ子

今年最後の畑仕事を少しずつ楽しみながらしています。当日を楽しみにしています。

小林達子

何時も優しいお心遣いありがとうございます。風をひいて休んでました。折角のお誘い申し訳ございません。皆様によりしくお伝え下さいませ。

船津和枝

誠に残念ですが10月16日(水)PMから熱を出して(本人はカゼという)しまい、欠席させていただきます。

(ともえ記)

杉山吉昭

長寿祝福式にお招きいただきありがとうございます。当日、私の所属する「句会」がありますので欠席させていただきます。祝会の盛会を祈念申し上げます。

長谷部芳子

主に感謝いたします。日々元気で生活出来、多くの友と楽しく踊りの輪を持ち、今も現役で励んで居ります。先日も盛大に支部発表会を持たせて頂き、一同と共に嬉しく感謝でいっぱいです。

大村愛子・大村陽一

母はが外出が無理なため欠席。私(陽一)は当日午後から所用の為に欠席。

柴田祐爾

楽しみにしています。

室谷三郎

健康に恵まれ、元気に暮らしております。今後ともよろしくお願ひいたします。

皆さん、これからもどうぞお元気で

◎“ハレルヤ農園”から今年、最後の便りが届きました。

四季の遷ろいは瞬く間…。私たちのハレルヤ農園も静かに冬の訪れを待つばかりです。今年は「高温多湿」の影響が色濃く出た年でした。それでも作物たちは主のご恩寵のもと一生懸命頑張ってくれました。しかし人の欲は尽きぬものですね。あれは良かったけどこれはダメだった…毎年同じものが同じようにできないのが素人の成せる技。だから楽しいハレルヤ農園、ひとまず今年のお恵みに感謝、そして秘かに来年への欲を掻き立てつつ豊作祈願と行きましようハレルヤ！！

10月最後の主日礼拝の後は、“芋煮会”で締めました。もっともこの原稿を書いている時は、まだ食べていませんけど。



◎幼稚園改築計画の進捗状況

来年7月着工を目標に作業中です。改築にあたり、色々な要望をかなえるべく検討していますが、昨今の社会状況の影響もあり、資金と計画は中々折り合いをつけることが困難な状況です。

資金が不足していて、文科省の補助金の申請や、融資を検討していますが、返済能力も限られているため知恵を絞っているところです。改築は老朽対策と地震対策の両面から何としても実施しなければなりません。

また、次世代を担う子どもの育成と教会の宣教の場としても大切な幼稚園です。何とかしっかり改築したいと祈りつつ取り組んでいます。物心両面のご支援をどうぞよろしくお願い致します。更に詳しい状況を知りたい方は建築委員までお問い合わせください。

建築委員は、鈴木園長、下澤司祭、高橋、木末、橋本、(長)尾関です。

16. 星

彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。

(マタイによる福音書2章9節)

この聖句の「彼ら」は、東から来た占星術の学者たちです。以前の訳では「東方の博士たち」でしたが、この箇所は、新共同訳が原文に近いようです。東方から来た人物のことをギリシャ語では「マゴズ」と記されており、他の学者や賢人とは異なる単語になっています。「マゴス」は、メディア王国の神官のことで、これが、ペルシャで「マグ」となり、ゾロアスター教の祭司になりました。この言葉は英語のマジックの語源でもあります。

この学者が星に導かれて西方に旅をしておさなごイエスに出会ったのです。地球は自転していますから太陽でも月でも星でも西へ西へ移動しています。この速さは24時間に地球一周ですから、ペルシャやイスラエルのあたり(北緯35°)では時速1400kmほどです。とてもついて行ける速さではありません。

でも星に導かれることはないのでしょうか。真上に輝く目立った天体を気にしながら歩いていると、歩いている方向にその天体もついてくるような気がします。そして、止まると、その天体もそこに止まるような気がします。ほんとです。遠方からの星の光は平行な光線で、地上の私たちの移動に拘わらず何時も同じ方向から照らすように見えるのです。

星の形ですが、光芒が5方向に広がる五芒星形を思い浮かべます。クリスマスツリーのでっぺんに飾るダビデの星もこの形です。イスラエルの国旗にはシオンの星といわれる六芒星形が使われています。古代エジプトの壁画の中には八芒星形が描かれています。そして昔の日本では、小さな丸型または点を星とっていました。家紋にも九曜(9つの星)などとあります。望遠鏡で星を見ると球形に見えます。

(『聖書に見られる理科のことば』文芸社刊より)

来月から“降臨節”に入ります。星に導かれ幼子イエスにたどり着いた博士たち。

◎“ローソクもらい”と“ハロウィン”

私がか子どもの頃、北海道の七夕は8月7日でありました。夕方になると子どもたちが提灯を持って近所の家々を歌を歌いながら回ったものです。地域で歌詞は若干違うようですが、旭川では「ローソク出一せー出一せーよー、出一さーないとー かつちやくぞー おーまーけーにー噛みつくぞー」と歌いました。それでローソクでは無く、お菓子を貰う訳ですが、期待に反してローソクを出されてガッカリという事もありました。どうも北海道だけのようで、しかも習慣のない地域もありました。

さて、10月の行事でもありキリスト教とは関係のないものに”ハロウィン”があります。かぼちゃを細工して飾ったり、魔女や幽霊、コウモリ等に仮装して”ローソクもらい”と同じように家々を訪問して「トリック・オア・トリート(お菓子をくれないと悪戯するよ)」と言いながらお菓子を貰います。何か”ローソクもらい”と似てますね。

これはケルト民族の信仰であるドルイド教に起源があります。ドルイド教の暦では11月1日が新年にあたり、その前日の10月31日は大晦日であり、神々が人間に悪さをすると考えられて魔物から身を守るために様々な事をしました。それがアイルランド人のアメリカ移住に伴って民間行事に変化していきました。

キリスト教の宗教行事ではなく、かつては悪魔崇拜につながると否定された歴史もありますが、単なる娯楽行事として楽しまれています。

◎諸聖徒日とは

「小さき群」にはその月に逝去された方のお名前や何周年かを掲載してきました。しかし今年から11月の「諸聖徒日」に併せて記念する礼拝を行なうことになりました。

ローマ・カトリック教会では全ての聖人や殉教者のために記念する祭を行なってきました。古くは「万聖節」と言い、今日では「諸聖人の日」と呼ばれ、聖公会では「諸聖徒日」として11月1日とその日とされています。

宗教改革後は、プロテスタント教会では聖人への崇敬が廃止されたことから徐々に廃れていきました。ただし聖公会では、11月2日を「諸魂日」として全ての逝去者のために祈る日と定めています。

逝去者記念聖餐式のご案内

11月3日の主日は教会につながる全ての方々を記念する礼拝を行ないます。ご用意いただける方は小さめの「遺影」をお持ちください。礼拝中に「亡き人を偲ぶ」お話を、船津和枝さんと橋本知樹さんからいただきます。

2013年11月 主日礼拝の役割分担と聖書日課、聖歌の表

	3日 緑 聖霊降臨後第24主 日 (特定26)	10日 緑 聖霊降臨後第25主 日(特定27)	17日 緑 聖霊降臨後第26主 日 (特定28)	24日 緑 降臨節前主日 (特定29)
司式	下澤司祭	下澤司祭	下澤司祭	下澤司祭
説教		下澤司祭	下澤司祭	下澤司祭
補式	寺本司祭	寺本司祭	寺本司祭	寺本司祭
信徒奉事者	山本雅之	大村倫子	尾関敏明	山本雅之
奏楽	斉数 貴	寺本敦子 小貫耕喜	尾関真理	下澤依子
アッシャー	寺本敦子	大野佳子	小貫耕喜	木末 康
オルター	夏堀寿美子	飯塚幸子	小貫睦子	木末幸永
日曜当番	寺本敦子	飯塚公男	大村倫子	寺本敦子
旧約聖書	イザヤ書 1:10-20 船津ともえ	ヨブ記 19:23-27a 鈴木典明	マラキ書 3:13-20b, 23-24 大野佳子	エレミヤ書 23:1-6 野口 環
詩篇	32	17	98	23
使徒書	テサロニケⅡ 1:1-5, 11-12 山本雅之	テサロニケⅡ 2:13-3:5 飯塚幸子	テサロニケⅡ 3:6-13 船津房子	コロサイ書 1:11-20 飯塚公男
福音書	ルカによる福音書 19:1-10	ルカによる福音書 20:27, 34-38	ルカによる福音書 21:5-19	ルカによる福音書 23:35-43
入堂	519	5	15	333
福音	291	252	325	563
奉献	290	391	503	317
陪餐	522	260	548	251
退堂	521	470	535	170
備考	逝去者記念聖餐式 教会委員会	婦人会例会 誕生会		

説教ダイジェスト 2013. 10. 6

司祭こるべ

「からし種一粒ほどの信仰」 ルカによる福音書 17:6

主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。

自立生活を前にして自分たちには何も力がないと思い込み、先生であるイエスに「信仰を増してください」と、弟子たちはお願いしました。強い信仰があれば何とかなると思うのは当然です。しかしイエスは、「からし種一粒ほどの信仰」で充分。それはすでにお前たちは持っていると言いました。からの種は本当に小さいものですが、家の屋根に届く高さの木に成長します。小さな種からは想像できない大きさです。

人生は、マラソンや長大な旅に喩えられます。水戸黄門の主題歌に「人生楽ありや苦もあるさ」という通り、生きていく上で、悩みや苦勞のない人というのはめったにいません。苦しくなった時に何に頼むのが問われますが、人間として信心に向かうのは当然だと思います。よく日本では、宗教的な信心に向かうことを「逃げ」と解釈することがありますが、これは人の心は強くなければならないという、一種の強者の論理に立った考え方です。弱さが否定的に捉えられている限り、出口のない苦しみに留まらなければならないことがよくあります。辛い時に辛いと言って、悲しい時には悲しいと言える、誰かに助けて欲しいと叫ぶ、そういう当たり前の人間らしさが、イエスの言う「からし種一粒の信仰」なのではないでしょうか。それがあれば、不思議と助けは与えられるものです。

人間には色々な能力が与えられていますが、一番使わずに封印されているのが「信じる」という能力です。その力が発揮できれば、すでに持っている小さな種は必ず成長して行くのだと、イエスは語っておられます。